



魔力が無いと言われたので独学で 最強無双の大賢者

He was told that he had no magical power, so he
learned by himself and became the strongest sage!

になりました!

2

Yukihana Keita
雪華慧太

Illustration
ダイエクト



エミリア

アルディエントの
元王女。騎士団の
回復役を務め、
「聖王女」として
親しまれる。

ディアナ

アルディエントを護る、
エルフの女騎士団長。
ルオたちに力を
貸す姉御的存在。

ルオ

元数学者の転生者。
魔力が計測されず公爵家から
追放された。自身を捨てた父を
倒した後、大国アルディエントの
王となった。

フレア

ルオの下克上に
協力した良き相棒。
負けん気が強く、
戦場でも活躍する。

ジャミル

西の大国シュトハイドの王。
容赦ない侵略で獣人族の
国を滅ぼした。

リーシャ

獣人族の国
ルディーリアの王女。
国を滅ぼされた経験から、
人間を嫌っている。

ジュリアス

ルオの異母兄。
宰相として政治面で
弟を支える。

シオン

ジャミルに仕える
謎多き仮面の男。
剣と魔法に長け、雷を操る。

———主な登場人物———
Main Characters

1、プロローグ

アルディエント暦一八七六年、一人の若者がこの地に現れた。

その男の名はルオ・ファルーディア。

魔力すら持たぬとされる第五等魔法格として生まれ、公爵家の嫡男でありながらも無能なクズだと言われ、家を追われた少年だ。

だが、彼はただの少年ではなかった。

前世では日本人であり、優れた才能を持つ若き数学者だったのである。

彼は十年の時を費やして、己の中に眠る、強大だが常人には決して使いこなすことが出来ない力——劣等魔力の謎を解き明かした。そして、魔導と前世の教養を組み合わせた数学的魔導術式『神言語』によって、それを制御するに至る。

ルオはその後、騎士爵家の令嬢フレアと協力して素性を偽り、士官学校に入学する為の実戦式戦闘術試験に挑み、次々と強敵を打ち破っていった。魔法格が全てと言われるアルディエントの常

識を覆し、国を手に入れる為に。

そんな中、同じように魔法格による支配に疑問を持ち、彼に手を貸したのは美しい王女エミリアである。

彼女たちの協力を得てついにルオは、この国で最強の英雄であり、彼に無能の烙印を押した父ゼギウスとの決戦に臨む。

その戦いで、かつてこの地を蹂躪したという、魔神デュランスペインの力を宿す闇の神具さえも打ち砕いたルオ。

それは、傲慢な国王や高位貴族たちによる絶対的な支配をも崩した瞬間であつた。

人々は若き英雄の誕生に沸き立ち、彼は英雄帝レヴィンの再来と呼ばれ、大国アルディエントの新しき王となる。

それから程なく――

アルディエント西方、ヴァルフェント公爵領。

「ふざけるな！ 何が新国王だ、俺は認めぬぞ。ルオ・ファルーディアだと？ 奴は十年前、魔力もない無能者だと父親にさえ見捨てられたゴミクズではないか!?」

西方の大領主であるヴァルフェント公爵は、怒りを込めてその声を上げた。

一万もの私兵を集め、その先頭で大剣を手にとると天にかざす。

「第五等魔法格のクズが、第一等魔法格に生まれた者に逆らうなど決して許されぬ愚行だと、教えてやらねばならぬ。神具とも呼べるこの大剣バルベオスにかけて！」

ヴァルフェント公爵のその声に、傍にいる側近の一人が怯えたように声をかける。

「し、しかし、公爵閣下。新王ルオ・ファルーディアはあのゼギウスを倒したとか。三英雄の筆頭、この国最強の男を……」

その瞬間――

「馬鹿めが!!」

ヴァルフェント公爵の怒声と共に、側近の首は刎ねられた。

兵士たちは公爵の体から立ち上る強大な魔力と怒気に息をのむ。

そして、ヴァルフェントは嘲笑った。

「怖気づきおって！ 臆病者には用はない。三英雄だと？ 俺がその気になれば、とうに三英雄になどなれておったわ。ゼギウスが敗れ去ったのは、結局奴は器ではなかったということよ」

肥大化した自尊心と傲慢さが溢れた額に、ある印が浮かび上がった。

聖印と呼ばれる第三の瞳だ。魔導の奥義の一つである。

それは漆黒に染まっていくと、手にした大剣にも黒い炎が宿っていく。

強い属性を帯びた聖印は色を得て、魔聖眼ませいがんという名のさらに恐るべき力に変化するのだ。

「見よ、この魔剣バルベオスを！ 数々の英雄を輩出はしりだした名高きヴァルフエント家の秘宝よ。いずれ機を見てゼギウスの寝首をかいてやるうと思っていたが、奴が死んだのであれば丁度いい。国王の座を篡奪さんだつしたルオ・ファルーディアを滅めつし、この我こそがアルディエントの王となってくれるわ！」

兵士たちはヴァルフエントの強大な魔力に怯えながら、その後に続く。

すると、目の前に村が見えてきた。小さな農村だ。

ヴァルフエントの傍に仕える騎士の一人が主に尋ねる。

「公爵閣下、どうやら進軍先に村があるようです。迂回うかいいたしましょう」

騎士の言葉にヴァルフエントは笑いながら答える。

「何故だ？」

「は？ な、何故だとは……」

このまま進めば、村の田畑を踏み荒らすことになり、幼子や老人がいる家は逃げ遅れ、死人が出るだろう。

だが、ヴァルフエントはそれを意に介する様子もない。

「平民など我らに尽くす為のクズどもではないか？ そんなことも分かんのか。俺が王となる尊

き進軍を邪魔するものは、踏みつぶし焼き払えば良いのだ。逆らうのであれば、貴様も先程の愚者のようになるぞ。ふは！ ふははは!!」

ヴァルフエントの言葉に、騎士は先程の首を刎ねられた男のことを思い出し、身を震わせる。

そして、声を上げた。

「そ、そのまま進軍せよ！ あの村を焼き払え！ 公爵閣下がそうお望みだ」

側近の騎士の声に、兵士たちは村に先行すると、進軍の妨げにならぬよう家に魔法で火を放ち始める。

「そうだ。クズどもなどいくら死んでもどうということはない。尊いのはこの俺のような選ばれし者だけなのだ」

逃げ惑う村人たちの姿を満足げに眺めながら笑うヴァルフエント。

その視線の先に、幼い子を抱いて逃げ遅れた親子の姿があった。

母親は娘を抱いて、必死に周囲の兵士に懇願する。

「ど、どうかお助けください。せめてこの子だけでも！」

大きな獣耳と尻尾が特徴的なその姿は、獣人族だ。

一年ほど前、彼らの王国であるルディーリアが戦火に遭い、その避難民たちがこのアルディエントにも小さな集落を作って暮らしていた。

腕に抱いた娘はまだ五歳にも満たないだろう。
母親は必死に娘を守ろうとしている。

それを見てヴァルフエントは残忍な顔で笑った。

「何かと思えば、ケダモノどもの村ではないか。くくく、気が変わった……殺せ」

「は？」

兵士たちは思わず問い返す。

「聞こえなかったのか？ 皆殺しにせよと言っている。これから始まる戦いのいい景気づけになるというものよ」

あまりの言葉に兵士たちも一瞬、動揺の色を隠せなかったが、逆らえばどうなるのかは、先程首を刎ねられた男が示している。

ヴァルフエントは笑いながら命じた。

「どうした？ やれと言っておる、聞こえぬのか!？」

兵士たちは剣を抜くと、怯える獣人の母娘に切っ先を向けた。

幼い少女は泣き始める。

「うえ、うえええん！ ママあ」

「ああ、エマ……」

（神よ、私はどうなってもかまいません。どうかこの子だけは、エマだけはお救いください！）

母親はしっかりと娘を抱きしめながら天に祈った。

助けなど来るはずもない。

自分たちに訪れるのは、逃れることの出来ない死だと分かっているながら。

その時――

一体どこから現れたのだろうか。

気が付くと、エマと母親の前には一人の少年が立っていた。

美しいブロンドの髪を靡かせ、佇んでいる。

その瞳に宿るのは、まるで氷のように青く燃え上がる炎。

幼子を抱く母親は、自分たちに突き立てられるはずだった兵士の剣先が、地面に落ちていくのを見た。まるで何者かに切り落とされたかのように。

だが、目の前の少年は腰に提げた剣を抜いてはいない。

彼を前に兵士たちは後ずさり、ヴァルフエントは叫んだ。

「き、貴様何者だ!？」

青い目をした少年は静かに答える。

「貴様のような外道に名乗る名などない」



それを聞いてヴァルフエントの目は怒りに血走っていく。

そしてまるで獣のように吠えた。

「おのれ、貴様！ この俺を誰だと思っている！ 尊いこの俺によくもそのような口を！ 殺せ、この下郎^{げろ}を今すぐに焼き尽くせ!!」

ヴァルフエントの凄まじい怒気に押されるように、一万の大軍勢の前列から一斉に火炎魔法が放たれた。

恐ろしいほどの数の火炎が、一斉に少年と母娘に襲い掛かる。

ヴァルフエントは哄笑した。

「ふは！ ふははは！ 愚か者めが。何者かは知らぬが、獣どもと共に灰となるが良い」
無数の紅蓮^{ぐれん}の炎が彼らを焼き尽くすと思われたその時――

少年はこともなげに、指先を炎に向ける。

と、同時に兵士たちは、放った火炎がごとくどこか貫かれて凍り付いていくのを見た。
それをなしたのは、少年が放った無数の氷の刃^{やいば}である。

あり得ない光景だ。

数千にも及ぶ火炎が、それと同数の氷の刃に貫かれ、青く凍り付き、砕け散っていく。その中を
ゆつくりと歩く少年。

「その男と共に地獄に行きたい者は前に出る。そうでなければ、道を空けることだ」

少年の瞳はヴァルフエントを射抜いており、額には青く輝く聖印が浮かび上がっていく。

それを見て、兵士たちは思わず後ずさる。

そして、怯えたように口を開いた。

「青く燃え上がる炎、氷と炎の魔聖眼を持つ男……ま、まさか！」

兵たちが、一人の男を恐れるようにして道を空けていく。男とヴァルフエントが一直線に結ばれる。

その間を悠然と進む少年の姿を、獣人の母娘は見つめていた。

そんな母娘の傍に一人の少女が駆け寄る。

まるで赤い薔薇のように艶やかな髪を靡かせた少女だ。

「もう大丈夫よ！」

彼女は母娘を守るように前に立つと剣を構えた。

さらに、村から立ち上る煙の中から、白い鎧を身にまとった騎士団が現れる。

先頭にいるのは、美しい女エルフだ。

「どうやら間に合ったようだね。まったく、一万の軍勢の真ただ中に一人で先行するなんて、相変わらず大胆なことをする坊やだ。いいかい、みんなよく聞きな！ 村人を守りながら全軍臨戦態

勢に入れ」

彼女は、敵の軍勢に対峙しながら、村民を守る配置を命ずる。

そしてヴァルフエントに言い放つ。

「ヴァルフエント公爵。観念することだね。この周囲はもう王国の騎士団が固めてある。王国の守護天使の名に懸けて、お前のような奴を許すわけにはいかないんだよ！」

そう言って鮮やかに剣を構えるエルフの女騎士の姿に、ヴァルフエント軍の兵士たちは動揺の声を上げる。

「あれはディアナ・フェルローゼ！」

「王国の守護天使だ」と

そして、改めてヴァルフエントの前にやってくる少年を見つめた。

「では、このお方は……」

「ああ、間違いない。新王ルオ・ファルーディア陛下だ！」

幼い子供さえ首を刎ねよと命じた主と、その幼子を守ろうとした少年を見比べる兵士たち。どちらに従うべきか、戸惑いのどよめきが広がっていく。

その光景に、ヴァルフエントは怒りの咆哮を上げた。

「おのれ！ この役立たずどもが!!」

ヴァルフエントが手にした魔剣バルベオスに、凄まじい魔力が集まっていく。黒い炎に包まれていく大剣のおぞましさに、兵士たちは後ずさる。

それでもなお、自分に向かつて進んでくるルオをヴァルフエントは嘲笑した。

「この力が分かんとはな。やはり貴様など第五等魔法格のクズに過ぎん！　ゼギウスなど、俺がその気になればこの神具——魔剣バルベオスで一刀両断しておったわ!!」

ルオはヴァルフエントの前に立つと、静かに口を開いた。

「神具だど？　やってみる。貴様などゼギウスの小指ほどの力もない」

「な！　なんだと小僧！　この馬鹿が、死ねええい!!」

怒りに満ちた叫びと共に、凄まじい勢いで魔剣バルベオスが振り下ろされた。

そこに込められた魔力は何者をも焼き尽くし、両断するだろう。

勝利を確信したヴァルフエントの傲慢な顔。

だが――

そこにいる兵士たちは皆見惚れた。

振り下ろされたヴァルフエントの大剣の上に立つ、少年王の姿に。

あの斬撃をどうやってかわしたのか、それに、剣の上にまるで羽根のように身を乗せるなどあり得ない。

まさに神技だ。

魔剣バルベオスが纏う黒い炎は凍り付き、いつの間にか抜かれたルオの剣が、ヴァルフエントの額の漆黒の魔聖眼に突き付けられていた。

「馬鹿な！　こんな馬鹿な!？」

「言ったはずだぞ。お前が行くのは地獄だとな」

まるで絶対零度の檻に封じられるがごとく、ゆっくりとヴァルフエントは凍り付いていく。

「終わりだ。ヴァルフエント」

「おのれ！　おのれえええ!!」

怒りに満ちた断末魔を残してその氷は砕け散った。

魔剣バルベオスは地面に転がり、辺りには静寂が広がっていく。

ディアナがヴァルフエントの軍勢に向かつて宣告する。

「あんたたちは、どうするんだい？　選ぶんだね。坊やに従うか、それとも死んだ主の後を追うかを」

王国の守護天使の言葉に、彼らは一人、また一人とその武器を地面に投げ捨てていく。

もはや彼らの顔に戦意などない。

無慈悲なヴァルフエントの姿を見て、どちらに従うべきかをとうに悟っていたのだ。

「お、俺は嫌だ！ 女や幼子にまで手をかけるなど」

「ああ、そうだ……そのようなこと、人がすることではない」

兵士たちは次々にルオの前に膝をついた。

「陛下、どうか愚かな我らをお許しくださいませ」

「我らは、ルオ様に従います」

ルオは頷くと、踵を返した。

そして、我が子を守る為に必死に身を挺した獣人の母親を見つめる。

「安心するがいい。貴方達は、俺が王として責任を持って保護しよう」

思いがけないルオの言葉に彼女は涙した。

獣人であることで彼女たちは、この領地で差別を受け続けていたからだ。

滅んだ国の民として、行先さえ定まらずに転々としながら。

「ありがとうございます！ ありがとうございます！ 陛下、私はミレーヌ。この子はエマと申します」

エマは自分と母を救ってくれた少年を見つめる。

先程まで戦っていた時とはまるで別人のような優しい笑顔に、小さな手を差し伸べた。

彼女の愛らしく大きな瞳と獣耳に、二人を守りながら傍にいたフレアも思わず笑みを浮かべる。

そしてルオに言った。

「ルオ、村人やこの子たちを連れて、一度公爵領との境にある騎士団の駐留地に戻りましょう。エミリア様もきつと心配しておられるわ」

「そうだな、そうするでしょう」

ルオはフレアに答えると、村人たちを保護した後、全軍に撤退を命じた。

騎士団とルオに投降した兵士たちが次第にその場を去っていく。

後に残されたのはルオとフレア、そしてディアナだ。

ディアナは、ヴァルフエントが残した魔剣バルベオスを拾い上げる。

それから呟いた。

「魔剣バルベオスカ。ヴァルフエントはこれを神具などと言っていたが、とてもゼギウスが使っていた闇の神具デュランスベインとは比較にならないね。あの時のゼギウスの言葉、あれはただのたわごとだったのか、それとも……」

真剣な表情になっていくディアナを見て、ルオが声をかける。

「どうしたディアナ？ 行くぞ」

「あ、ああ、そうだね坊や。いや、ルオ陛下」

不安を誤魔化すかのようにそう言ったディアナに対して、ルオは肩をすくめる。

「好きに呼べばいい。その方があんたらしいからな」
それを聞いてディアナは笑う。

「坊やのそういうところが好きなのさ。ふふ、存外年下も悪くないね」
わざとしなを作ってルオに身を寄せてみせるディアナ。鎧の上からでも分かる大きな胸がルオの腕に押し当てられる。

それをフレアが横目で睨んだ。

「はあ？ まったく、このエロエルフは。ルオから離れなさいよ！」

「失礼だね。いいじゃないか。好きな男にアタックするのは自由だろ？」

そして、フレアの胸を見ると笑みを浮かべる。

「それとも成長しない胸が気になって、あんたはアタック出来ないのかい？」

「はああああ!? こ、殺すわよ!!」

剣を抜きかけそうなフレアと彼女をからかうディアナを尻目に、ルオは歩き始める。

彼が口笛を吹くと、少し離れた場所で待っていた見事な白馬が駆け寄り、それに騎乗した。

「やれやれだな。先に行くぞ」

その後を、赤毛の馬に飛び乗ってフレアが追う。

「ちょー！ 待ちなさいよルオ。あんた今、私の胸とディアナのを見比べたでしょ？」

「さあな」

「さあなって何よ！ 待ちなさいって言ってるでしょ」

ディアナは若い二人の背中を眺めながら笑みを浮かべる。

そして、もう一度手にした魔剣を見つめた。

「神具を持つ者が他にもいるというゼギウスのあの言葉。もしも本当であれば、捨ておけない話だ。
私の取り越し苦労ならいいんだけどね」

ディアナはそう呟くと、肩をすくめて二人の後を追った。

一方その頃、士官学校の学生ロランはアルディエント王宮の中を走っていた。

現在の彼は、士官学校に通いながらも、その能力を高く買われ、王宮勤めの役人でもある。

そして、ふと立ち止まると窓から西の方角を眺めた。

「今頃は、ルオ様はヴァルフント公爵領に着いている頃だよ……陛下のことだから心配はいらないと思うけど」

ロランは小さな不安をかき消すように頭を振ると、また走り出す。

「いけない。僕だって自分が出来ることをしないと。それにしても、まったく忙しいったらないやー！」

愚痴にも似た言葉をこぼしながらも、その顔は希望に満ちている。

ほんの少し前までは、士官学校の中で自分の人生を諦めかけていたロラン。

そんな彼が変わったのはある朝、ある人物に出会ったからだ。

(ルオ様、格好良かったよなあ……)

自分を蹴り飛ばした十傑会のギリアムさえ一步も動けないほど、ルオの剣技は凄かった。

そして、この国最強のゼギウスさえも倒した、輝く剣を持った雄姿を思い出して、またその場に立ちすくむ。

「おっと、仕事仕事！」

慌てて王宮の廊下の角を曲がると、ブロンドの凛々しい青年にぶつかりかけた。

この国の王にどこか似た風貌をした人物だ。

ロランは慌てて頭を下げる。

「ジュリアス様！ す、すみません。急いでいたもので」

「ロランか。いいさ、いつもご苦労だな。お前の仕事ぶりにはルオも俺も感心しているぐらいだ。今回のルオの西方の遠征も、お前たちが集めた情報のお蔭で先んじて動くことが出来たのだからな」

「そ、そんな！」

恐縮するロランに、ジュリアスは苦笑しながら続ける。

「西方の反乱の話。本来なら、国王のルオではなく俺が遠征軍の指揮を執るべきだろうが、ルオの奴、面倒なことは俺に押し付けて気楽なものだ」

「はは、ルオ様らしいですよ。自らご出陣されるなんて」

「まったくだ。だが、そういうところがレヴィンの再来と呼ばれる所以だろう。まあ、ディアナもフレアも一緒だ、心配することはあるまい」

「そうですね！」

ロランは目の前の青年を眺める。

白い軍服を身に纏ったジュリアスの姿はとても爽やかだ。

(ジュリアス様、本当に雰囲気が変わられたよな。以前とはまるで別人だよ。今やこの国の宰相閣下だもんな、でも偉ぶったところなんて全くないし)

ジュリアス・ファルーディア。彼はこの国の王の兄だ。

三英雄の一人である紅蓮の魔導騎士オーウェンを圧倒したほどの天才。士官学校の十傑会の会長であり、雲の上の存在だった。今ではそんなジュリアスの傍にすることに自分でも驚きながら、ロランは頭を掻いた。

「ほんとに僕なんか、ここに居てもいいのかなって、今も思います。こうして、ジュリアス様た

ちと一緒に仕事をしているなんて、まだ信じられないんです」

それを聞いてジュリアスは笑った。

目を細めて窓から空を見上げる。

「それを言うならば、この俺に宰相の資格などありはしない。自分の命を狙った俺にこんな仕事を任せるとは、あいつはとんだお人よしだ」

「ジュリアス様……」

ロランは、言葉とは裏腹にジュリアスのどこか嬉しそうな表情を眩し気に見ていた。

宰相の地位を得たことが嬉しいのではなく、弟との絆が嬉しい、そんな表情を。

（この人はきつと、これからどんなことがあっても陛下を裏切らない。信頼出来る人だ）

そんなことを思いながら、上司であるジュリアスを見つめるロランだった。

ロランは今、ジュリアスの下で働いている。

内政、外交を含む様々な案件を処理する部署の役人の一人だ。

様々な情報を収集、分析し、的確な国の方針を上申する、機密情報も扱うような部署の上級官吏である。

今までは第二等魔法格以上でなければ、試験すら受けられなかった。

ジュリアスはロランに言う。

「お前の情報分析力は俺の部下の中でも最も優れている。これもルオが魔法格による官吏試験の条件を廃したお蔭だな」

「はい、ジュリアス様！ 僕だけじゃないですよ、仲間たちの多くが張り切ってこの国の各地で働いています！ それに、今回のことの本当の功労者はジーク様です。あの方の情報網は本当に凄い。ルオ様の影と呼ばれるのが分かります」

ジュリアスはロランの言葉に頷いた。

「ジーク・ロゼファルスか。確かにな。元トレルファス家の使用人と聞くが、頭のいい男だ。ルオが国王になった後、伯爵に任じられると僅かな間に国中に自らの部下を散らしていた。中にはルオに不満を持つ上級貴族たちのところに、使用人として潜り込ませたりもしてな」

「はい、ロゼファルス伯爵が元々使用人だったからこそ分かることもあるのかもしれませんが、余程の明晰な頭脳と、部下たちからの信頼がなければこうはいきません。ルオ様が信頼なさっているのも頷けます。今回僕たちが分析した情報の多くは、ジーク様からのものでしたから」

ジーク・ロゼファルスは、ルオの下克上の最初の協力者だ。ルオは彼の身分を借りて士官学校の試験に潜り込み、ゼギウスとの戦いに漕ぎ着けた。

ルオが国王になった後に伯爵に任じられたが、使用人の分際でと揶揄する者もいる。しかし、その能力の高さをロランは知っていた。

「それもこれも、やっぱりルオ様のお蔭です。魔法格が絶対の頃なら、第三等魔法格のロゼファルス伯がこのような役回りをすることも出来なかったのですから」

ロランは笑顔でそう言った。

官吏だけではない。全ての職業において、魔法格による条件は廃された。実力がある者ならば己の望む職業に就ける。

ジュリアスは言う。

「野心を持っていた上級貴族どもも、これでほぼ抑えたことになる。後は都から遠い西方だけが懸案^{あん}だったが、今回の遠征が無事に終わればもう国内に不安要素はないだろう」

ロランは大きく頷いた。

「それにルオ様の即位と同時に国法は改正され、税制も改革されました。お蔭で、一部の上級貴族だけが富を独占することもなくなった。国民は皆、働くことに喜びを感じています。これからこの国はきつとますます栄えるでしょう」

ロランのような若者からも新たなアイデアが次々と出され、良いものは実行される。

それに耳を傾けることを目的に、国王であるルオも宰相ジュリアスもまだ士官学校に籍を置いている。その為に王宮内には士官学校の学び舎^{まな}の一部や、ルオが長を務める執行部も併設されていた。ロランのような優秀な学生が国政に携^{まな}わることが容易なのは、それが理由でもあるだろう。

若い力が国政に反映されることに喜びを感じている学生たちは多い。

下からの意見が、直接上まで届くなど、今まででは考えられなかったことだ。

「まったく、お蔭でこちらは忙しだがな。ルオの奴、人使いが荒いことだ」

「ですね！」

そうやって肩をすくめるジュリアスに、笑顔を見せるロランだった。

二人はそのまま機密を取り扱う為の執務室へと入っていく。

部屋に入るとジュリアスは鍵をかけた。

西方での反乱の情報こそあったが、内政もようやく安定し始め、ここ最近ロランには特別な任務を与えている。

もちろん、その為に動く人員も与えて。

「ロラン、それで例の一件について何か分かったことはあるのか？」

ジュリアスの眼差^{まざ}しが鋭いものになっている。

その瞳を見つめながらロランは頷いた。

「ゼギウスが最後に残した言葉にあった、例の神具の話ですが、もしかすると思わぬ相手が絡んでいるかもしれません」

「思わぬ相手だと？」

「はい」

ロランは机に一枚の地図を広げる。

そこには一つの大陸が描かれている。

様々な国々が並ぶその地図の上に、一際大きな大国が二つあった。

一つは、アルディエント。そしてもう一つは山脈を越えてその西に位置する大国である。

国土の広さで言えば、このアルディエントさえ凌ぐだろう。

ロランの視線はその国へと向けられている。

「黒騎士王^{くろきしおう}ジャミルが治める国、シュトハイドか。ロラン、聞かせてくれ。お前たちが調べ上げたことを」

ジュリアスのその言葉に、ロランは深く頷くと、自らが知った事実を話し始めた。

それを全て聞き終えると、ジュリアスは呻いた。

「まさかな……だが、俺も疑問に思っていたのだ。父上がどうやってあの槍を手に入れたのかを。

ロラン、お前は護衛を連れてルオのもとに行け。このことを伝えるのだ」

「はい、ジュリアス様！」

ロランは旅の支度をする為に部屋を後にした。

彼が西方にいるルオのところに合流するには、早くても十日ほどかかるだろう。

ルオたちも反乱の鎮圧^{ちんあつ}だけではなく、領主が不在となった公爵領を統制下に置く為に、暫くは西方に滞在するはずだ。

執務室に一人立つジュリアスは、部屋の窓から西の方角を眺める。

そして呟いた。

「ルオ、気を付ける。もしかすると今回の西方の遠征、思わぬ長旅になるかもしれんぞ」

2、聖王女^{せいおうじょ}

ヴァルフエント領の外れの森のふもとに密かに作られた騎士団の駐留地に、ルオたちが戻った頃。保護された村人たちは、一人の少女の周りに集まっていた。

彼女の名はエミリア。前王の娘だ。ルオが王となった今は王女ではないが、彼女がこの国の為に果たした役割と、白薔薇のようなその可憐さを称え、聖王女と呼ばれている。

ヴァルフエントの非道な行いで焼け出された村人の中には、酷い火傷^{やけど}を負った者もいる。

そんな彼らの傷に、エミリアはそっと手で触れた。

清らかな魔力が辺りに広がっていく。

同時に、エミリアの額に聖なる波動を感じさせる聖印が開いた。

「ああ、神様……痛みが和らいでいく」

エミリアの魔力が住民たちの傷を次々と癒^{いよ}していった。

これほどのヒーラーは稀^{まれ}だろう。

村人たちは傷を癒してくれた少女に頭を下げて礼を言った。

「ありがとうございます！」

「本当にありがとうございます！」

エミリアは彼らを見て微笑んだ。

「いいのです。元はと言えば、我が国の者が恥ずべき行いをしたのが原因なのですから」

そんな少女の肩の上には可愛らしい生き物が座っている。

そして主人が感謝されたのを見て、嬉しそうに鳴いた。

「リルリル」

それは純白の子猫リスのリルだ。

リルを肩に乗せた姿は、エミリアのトレードマークでもある。

「流石エミリア様！ 一つ見ても聖王女に相応^{ふさわ}しい力です」

「うむ、神々しい限りですな」

そう言ったのは、エミリアの侍女マリナと護衛騎士のグレイブである。

二人の言葉にエミリアは恥ずかしそうに答えた。

「もう、二人とも大袈裟^{おおげさ}だわ。これもルオ様のお蔭です。毎晩特訓をしていただいて、ようやく聖印を開けましたから。自分の力が皆の役に立つことが嬉しくて」

マリナが意味ありげな表情でエミリアに囁^{ささや}く。

「あの秘密特訓の効果は凄いですよね。それに、額を合わせて踊るルオ様とエミリア様がとても素敵^{すてき}ですし！」

その言葉にエミリアは顔を真っ赤にする。

「あ、あれは聖印を開く為のただのトレーニングだわ！ でも、お蔭でこうしてルオ様に同行することをお許しただいたのですから」

ルオと額を合わせ、そして息を合わせて踊ることでお互いの魔力を絡み合わせて、魔力を押し上げてもらう。

相性もあるが、それによってエミリアの魔力は以前よりも遥かに高まっている。

元々王家の血を引くエミリアの素質を考えれば、聖印を開くことが出来たのも当然と言えるかもしれない。

先程戻ってきたディアナも、感心したようにエミリアの治療を眺めていた。

「私も聖騎士としてヒーラーの力も持つてはいるけど、エミリア殿下は聖属性、それも回復魔法にかけてははずば抜けてる。聖王女の名も領けるね」

「そんな、ディアナまで。あ！ ルオ様！ フレア！ お帰りなさい……あら、その子は？」

「エミリア、今帰った。ああ、この子は獣人の村の子供だ」

そんな中、フレアと一緒に戻ってきたルオの傍には、ちょこちょこ彼の周りについて回る小さな少女の姿がある。

獣人の少女のエマだ。

母親のミレーヌは申し訳なさそうに傍でそれを見つめている。

「すみません。この子がどうしても陛下の傍にいたいと聞かなくて」

エマはルオを見上げると指をくわえる。

「王さま、エマのこと助けてくれたです。ママも助けてくれたです」

そう言って大きな耳をピコピコと動かすと、尻尾を揺らしてルオの周りを嬉しそうに歩いている。

エミリアとマリナはそれを見て目を輝かせた。

「まあ！ なんて可愛らしい」

「ほんとに！ ふふ、それに無愛想なルオ様に、こんなに懐いてるなんて」

ルオは肩をすくめるとマリナに言う。

「無愛想は余計だ」

エマは首をかしげてルオを見つめる。

「王さま優しいです。エマ、王さま大好きです！」

エミリアはそれを聞いて大きく頷いた。

「エマっていうのね。ふふ、分かるわ。私もルオ様のことが大好きなもの」

今は少し無愛想なところがあるが、エミリアが幼い頃初めて会った時のルオはとても優しく、今でもその本質は変わっていないと彼女は信じている。

だからこそ彼に全てを託したのだ。

だが、そう言うってからエミリアは思わず顔を真っ赤にする。

「あ、あの今の『好き』っていうのはそういう意味じゃなくて。そ、その……」

そんな主を見てマリナはふうとため息をついた。

「安心してください。エミリア様がルオ様を好きなことはみんな知ってますから」

「も、もう！ マリナの馬鹿!!」

それを聞いて、家を焼け出されてそこに集まっている皆も笑顔になる。

フレアも笑いながら、無事救い出せた村人たちの姿を眺めた。

そして、自分と同じくルオの傍に立つ銀髪の少年に声をかける。

「それにしても、やるわねジーク。あんたの情報がなかったら、こんなに早くヴァルフェント公爵の動きはつかめなかったわ。彼らを救えたのはあんたのお手柄かもね」

それを聞いて、ジークは恭しくフレアに頭を下げた。

「恐縮です、お嬢様。これもこの領内に潜り込んでくれた者たちのお蔭です」

「お嬢様はやめなさいよ。もうあんたはトレルファス家の使用人なんかじゃないんだから」

フレアの言葉にジークは頭を掻きながら苦笑した。

「そうでしたね。ですが、やはりまだ慣れません」

「分かるわそれ。私も公爵家の令嬢なんて肩がこるもの」

ルオが国王になり、約束通りトレルファス家は公爵家としてルオを支えている。

騎士爵家から公爵家の娘になったフレアは、その艶やかな赤い髪と勝気な美貌から、国民の間で赤の薔薇姫と呼ばれていた。

ジークと共に、まさに成功の象徴とも呼べる存在だ。

「それにしても、こんな子供まで容赦なく殺そうとするなんてね。あの男、どうしようもないクズだわ」

ヴァルフェント公爵の残忍な顔を思い出しながら、フレアはそう言った。

そんな中、エマがルオの傍からちよこちよこ彼女のもとにやってくる。

そして、大きな耳をピコンとさせて、ルオがヴァルフェントと剣を交えている時、自分を守ってくれたフレアを見て、お礼を言った。

「赤い髪のお姉さま、ありがとです！」

普段は勝気なフレアも、そんなエマの笑顔を見ると思わず頬が緩む。

「ふふ、間に合って良かったわ、おチビちゃん。私の名前はフレアよ。それにしても、こんなところに獣人族の村があるなんてね」

ジークも頷いた。

「ですね。私が得た情報ではこの辺りには廃村しかないはずでしたが。ヴァルフェントも馬鹿ではありません。あれほどの軍勢を動かすことを気取られぬよう、人気が少ないルートを選んでいると報告を受けていましたから、彼も知らなかったのでは？」

「廃村ねえ。実際この子たちが住んでたじゃない。ルオが彼女たちの気配を感じて先行しなかったら危なかったわ」

フレアのその言葉に、村の長老らしき老人が申し訳なさそうに口を開く。

「あ、あの、誰も住んでいないようでしたので、いけないこととは思ったのですが、朽ちかけた家を直し、私たちが住まわせて頂いていたのです。我らはルディーリアの民、故郷を追われ今は放浪の身ですから」

長老の言葉に、ジークは得心がいったという顔をして答える。

「ルディーリアといえば、自然豊かで多くの獣人族が住む王国ですね。確か一年前だったか、西の大国シュトハイドに滅ぼされたと聞きましたが」

彼の言葉に村人たちは皆、悔しそうに唇を噛みしめた。
そして口々に言う。

「はい……ある日、突然隣国であるシュトハイドの黒騎士王が攻め込んできたのです。圧倒的な数の敵に、美しいルディーリアは踏み荒らされて」

「黒騎士王？ 確かシュトハイドの国王ジャミルね。そういえばここ数年で、多くの国を滅ぼして領土を広げているって聞けれど」

フレアの問いに、長老が頷く。

「はい、とても残忍な男です。女子供であろうと容赦なく殺して……民を守る為にルディーリア王も兵を率い、最後まで勇敢に戦ったと聞きますが、生きておられるのかさえも……」

村人たちは疲れ切った顔で俯いた。

「戦いを逃れ、生き残った僅かな者たちは散り散りになってしまいました。私たちも国境の山脈を、このアルディエントへと越えたのです。野山でなんとか食べ物を採り、必死の思いで生きてきました」

「山で生活をするのにも疲れ、数か月前、ようやくここで人がもう住んでいない村を見つけたのです。そして隠れて暮らしていたのですが、その村も燃やされてしまった」

住む場所を転々として、やっと落ち着ける地を見つけたのだろう。

村人たちの目には涙が浮かんでいる。

エマもそんな大人たちを見て悲しくなったのか、ぼろりと大粒の涙を流した。

「また、おうちなくなっただす……」

母親のミレーヌはそんな娘を抱きしめて涙を流した。

「大丈夫よエマ。また森で暮らせばいいわ、ママも頑張るから」
そしてルオに頭を下げる。

「お聞きの通りです、ルオ様。私たちはアルディエントの民ではありません。国を追われたとはいえ、貴方様の治める大地に勝手に住まう罪人なのです。ですが、どうかお願いします。贅沢は申しません。森に住み、生きていくことだけはお許しをくださいませ」

ルオたちに保護されたとはいえ、守られる理由がない彼らは皆俯いた。
国と王を失った今、彼らを守る者はもう誰もいないのだから。

エマもボロボロと涙を流しながら下を向く。皆のそんな姿を見ているのが悲しいのだろう。そして、せつかく安らげた家を失ったことも。

エミリアはそんな母娘をそっと抱きしめると呟く。

「罪人ですって？ 一体貴方たちが何をしたというのです。行く場もなく、壊れたあばら家^やを直し、肩を寄せ合い、生きてきただけではありませんか。そのどことが罪なのです」

彼女は祈るように両手を胸の前で合わせて、ルオを見つめた。

ルオは彼らを眺めると答えた。

「悪いが森に住むことを許すわけにはいかない」

「そんな、ルオ様！」

エミリアの悲痛な顔を見て、ルオは笑みを浮かべた。

「俺はアルディエント王として約束したのだ。責任を持つてお前たちを守ると。ならば、もう俺の民だろう？ 俺は自分の民を森に住まわせるつもりなどない」

ジークも頷いた。

「ですね、陛下。ヴァルフエント領を平定したら、この領内に彼らの居場所を作るべきでしょう。」

陛下がそう仰るのなら、既に彼らはこの国の民なのですから」

ルオやジークの言葉に、エミリアの表情が明るく輝く。

「ルオ様、ジーク！」

ミレーヌや村人たちは驚いたように目を見開いた。

「な、何故そこまでしてくださるのです……」

思わず声を詰まらせるミレーヌを見て、フレアが肩をすくめた。

「変わった男なのよこいつは。でも安心なさい、ルオは一度口にした言葉は必ず守る男よ」

ミレーヌは彼女を見た。

国王に対して口は悪いが、強い信頼を寄せているのが感じられる。

（ルオ・ファルーディア陛下。なんてお方なの、それに周りに集まる方々も……これが新しいアルディエント王国）

一見無愛想なルオ。だが彼の傍に集まる者たちは兵士に至るまで一様に笑顔だ。

それは彼らが皆、心からこの少年王を敬愛し、そのやり方に賛成している証に見えた。

そして、獣人族である自分たちへの蔑^{きず}みなど全くない。

まるでそれが当たり前かのように。

村人たちは深々と頭を下げ、長老は皆を代表してルオに感謝の気持ちを伝えた。

「ルオ様。我ら、このご恩は一生忘れませぬ」

そして思う。

（まだ、年若いと言うのに。英雄帝レヴィンの再来と呼ばれる理由がよく分かる。このお方は王の中の王だ。ルディーリア王も、このお方ならば敬うことをお許しくださることだろう）

ミレーヌは涙を流しながらその場で深々と頭を下げた。

「ありがとうございます陛下！ 命に代えても貴方様に忠誠を尽くすと誓います」
村人たちも一斉に頭を下げた。

そして、それを見たエマも尻尾をぴんと立てて言う。

「エマも王さまに忠誠を誓うです！」

母親を真似て頭を下げるエマが可愛くて、場はすっかり和んだ雰囲気になった。
そんな時――

くうううとエマのお腹の虫が鳴く。

「はわ……ごめんなさいです。でも、何だかいい匂いがあるのです！」

エマは、くんくんとその小さな鼻で、辺りの匂いを嗅いでいる。

大きな犬耳がピコピコ動いて、大きな尻尾が左右に揺れた。

それを聞いて、マリナがポンと手を叩く。

「いけない。忘れてましたわ！ そろそろ、夕食が出来る頃です」

怪我人が運ばれてくるまでは、マリナもそれを手伝っていたのだ。

彼女は少し離れた、騎士団の兵糧部隊が集まっている場所に駆けていく。

そしてすぐに戻ってくると皆に声をかけた。

「夕食の準備が出来たそうです！ 村の皆さんも一緒に食べましょう」
フレアも大きく頷く。

「そうね。ヴァルフエント公爵も倒したし、後はこの領地をしつかりと平定するだけだもの。その前に、まずは腹ごしらえだわ！」

「ふふ、賛成です。エマもお腹が空いているみたいだし」

エミリアは、指を咥えて美味しそうな匂いにする方角を見つめるエマを見て微笑む。

そんなエマの頭にポンと手を置くと、ルオは言う。

「行くか、ちび助」

エマは嬉しそうに彼を見上げた。

「はいです！ 王さま!!」

差し出されたルオの手を、エマはぎゅっと握ってちよちよこと歩き始める。

「まあ、ルオ様ったら」

エミリアは思わず笑いながら二人の後を追った。

マリナやグレイブ、そしてミレーヌや村人たちもルオたちについて行く。

それを眺めながらディアナが言った。

「へえ。意外だね、坊やの奴。こりゃ、子供が出来たら子煩悩になりそうだ」

そして、隣で二人を眺めて笑みを浮かべているフレアに問いかける。

「何見てるんだい？ まさか、坊やとの子供が出来たら、なんて考えてるんじゃないだろうね」

「は!? そ、そんなこと考えてないから!」

「どうだかね」

「ちょ! 待ちなさいよ」

ディアナを追いかけてフレアも、夕食が用意された兵糧部隊の屯所^{とんじょ}に向かう。

辺りにはいい香りが漂い、夕食の準備をしている兵士たちはルオを見て敬礼をすると、給仕^{きゆうし}を始めた。

割れにくく軽い軍用の皿に、湯気を立てる白いものが盛り付けられていく。

エマが不思議そうにルオに言う。

「白くてほかほかです」

ミレーヌも首を傾げながら尋ねた。

「これは一体……」

そんな二人を眺めながら、フレアは肩をすくめた。

「この辺りじゃ食べられていないから仕方ないわね。これはライスよ。東方ではパンの代わりに広く食べられている穀物^{こくぶつ}らしいけど、私もつい最近まで知らなかったわ」

エマがフレアを見上げる。

「ライスですか?」

「ええ、美味しいわよ。味気ない携帯用の乾パン^{かんぱん}なんかよりもずっといいわ」

ジークはフレアの言葉に頷く。

「はい、元々はルオ様がお好きで、国王陛下になられてからはよく召し上がっておられるものなのですが、温かく美味しいものですから軍用の補給物資に取り入れたのです」

夕食を準備していた兵士たちも頷く。

「私たちもすっかり気に入っています。炊^たく時の煙さえ風魔法で散らしてしまえば、敵に気取られることもありませんし。さあ、どうぞ」

兵士たちはそう言うと、熱々のご飯が載った皿の上に、今度はシチューのようなものをかけていく。

その中では、とろとろに煮込まれた肉や野菜が美味しそうに湯気を立てている。

「味付けはエミリア殿下とマリナ殿にいただきましたから、ご安心を」

村人の治療を行うまでは、エミリアたちも夕飯の準備を手伝っていたのだ。

皿に盛られていく料理を見て、またエマのお腹がくうと鳴る。

兵士は笑いながら、エマの為に小さめの皿を用意し、盛り付けた。

それを渡してもらって、エマはルオを見上げる。

「旨いぞ。食べてみるちび助」

「はいです！」

嬉しそうにそう言ってエマは、木のスプーンでそれをすくって食べる。

そしてぴんと耳を立てた。

「はふはふ！ とつても美味しいです!!」

笑顔になるエマを見て、村人たちもこくと喉を鳴らした。

廃村に隠れ住み、まともな食料もなかったのだ。当たり前だろう。

ミレーヌは兵士に料理をよそってもらって、自分も口にする。

ライスと呼ばれた白いものと、上にかかった濃い色のシチューのようなものが口の中でとろけて、

思わず声を上げた。

「美味しい！ これは一体……」

村人たちも給仕されたそれを夢中で食べる。

「これは旨い！」

「今まで食べたことがない味だ」

「ああ！」

エミリアはそんな彼らを見て微笑んだ。

「これもジークがルオ様から教わった料理で、カレーライスというそうです。体にいい香辛料が幾つも入っていて、私も好きですわ」

ルオの前世での記憶を元にして作られた料理なのだが、エミリアたちはもちろんそれは知らない。香辛料や野菜などは前世でのものと全てが同じではないが、エミリアやマリナ、そして王宮の料理人の手によって洗練され、より美味しいものになっている。

エミリアもスプーンでカレーを一口すくってぱくりと食べると、ほっこりした顔になる。

「不思議ですね。こうして皆で野外で食べると一層美味しく感じますわ」

「ほんとですね、エミリア様！」

マリナも頷く。その隣ではグレイブも舌鼓を打っている。

ジークがフレアに頭を下げながら言う。

「美味しいはずですよ。森を突っ切る強行軍の中、出くわした大猪をフレア様が仕留めてくださっ

たお蔭で、いい肉が手に入りましたから。大物で、兵糧部隊が運ぶのに手こずりましたが」

「まあね。いい具合に煮込まれてるじゃない？」

鍋の中で、大猪の赤身と脂身がとろりと煮込まれているのが見える。

フレアも給仕された皿を受け取ると一口食べた。

「はふ！ 確かにいけるわね」

ディアナが呆れたように言った。

「まったく。公爵令嬢が猪を捕まえてりや世話ないね。まあ、フレアらしいか」

「ならあんたは食べなくていいわよ、ディアナ」

そんなフレアの嫌味を無視するディアナ。

「ん？ いけるねこれは！ 野菜も肉もとろつとろだ」

そう言って美しい鼻梁をピクンとさせ、カレーを一口囓みしめて吞み込む。

ルオも傍にある切り株に腰を下ろし、食べ始めた。

すると、エマがその膝の上に座る。

慌てて止めようとするミレーヌに、ルオが静かに首を横に振った。

エマはルオの膝の上でカレーを頬張ると、嬉しそうにはしゃいだ。

「エマ楽しいです！ こんなに楽しいこと久しぶりなのです!!」

ミレーヌはその言葉に思わず涙した。

シウトハイドとの戦争で夫を亡くした後、娘を守る為に必死に逃げ延びてきた。

森の中で、時には木の根さえ食べながら。

それでも、母親に心配をさせないように笑顔で頑張る娘のことを、ミレーヌは一番よく知ってい

たからだ。

そんなエマが久しぶりに心から笑っているのが、嬉しくて仕方ない。

「ありがとうございます……陛下、本当にありがとうございます」

ミレーヌはそう言うと、楽し気に笑う娘の頭を撫でた。

エマはカレーを口いっぱい頬張って、こくりと吞み込むとふと思いついたように言った。

「とっても美味しいです。リーシャお姉たまにも食べさせてあげたいです！」

それを聞いてエミリアが首を傾げた。

「リーシャお姉様？ ここにはいない村人がまだいるのですか？」

それならば保護をしなければ、と村人たちに問いかけるエミリアだったが、一方で村人たちは何

かを隠すかのように顔を伏せた。

黙り込む村人たちにディアナが尋ねる。

「どうしたんだい？ 何か変だね。そのリーシャっていうのは誰なんだい？」

村人たちは押し黙ったまま顔を見合わせた。

そんな中、ミレーヌが思い切ったように口を開く。

「長老様。ルオ様にはお話しするべきです。このお方なら信頼が出来ますわ！」

彼女の言葉に村の長老は頷き、村人たちを見渡した。

黙り込んでいた村人たちも、ミレーヌや長老の顔を見てこくりと首を縦に振り、同意していく。皆のその姿を見て長老は、ルオの前に進み出ると深く頭を下げた後に口を開いた。

「ルオ様。確かに我がルディーリアは滅びました。ルディーリア王もはや生きてはおられぬでしょう。ですが、リーシャ様は、我らが姫君は生きておられるのです」

思わぬ長老の言葉に、ルオたちは皆、食事の手を止める。

フレアが驚いて尋ねた。

「貴方達の姫って、つまりルディーリアの王女ってこと？」

彼女の問いに長老は頷く。

「はい、左様でございます。リーシャ・ルディーリア殿下、我らの姫君にございます」

ミレーヌも深々と頭を下げた。

「どうかお許しくださいませ。このことは仲間以外に口外してはならないと、リーシャ様に固く言われておりましたので。ですがルオ様や皆様は私たちを受け入れてくださった。私たちも隠し事をするわけにはまいりません」

彼女はそう言うと、ルオたちに全てを話し始めた。

3、白の姫騎士

丁度その頃。

主であるヴァルフエント公爵が多くの手勢を引き連れて出陣し、手薄になった居城の城壁では、石垣の陰に二人の人影が息を潜めていた。

夕暮れの薄闇の中で、城壁の上を歩く見張りの兵士を物陰から見つめている。

一人はまだ幼い少女だ。

年齢は十二、十三歳ぐらいだろう。

白く美しい髪を靡かせて、静かに兵士の動きを見守っている。

その髪と大きく白い狼耳は、獣人族の中でも珍しい白狼族の証だ。

気が強そうだが、その美貌はどこか高貴さを感じさせる。

夕日が山の陰に沈み、辺りが闇に包まれていく。

そんな中、見張りの兵士が城壁の上を通り過ぎるのを見守った後、もう一人の女性が少女に声をかける。

「姫様」

少女にそう呼びかけたのは、青い髪をした女剣士だ。

こちらは年齢は二十代前半、凛とした顔立ちの獣人女性である。

青い狼耳は青狼族の証だ。

少女は青狼族の女剣士に頷く。

「ええ、サラ。行くわよ」

それはまさに一瞬の出来事だった。

見張りの死角をついて、城壁の僅かな凹凸おうとつを利用して一気に壁を駆け上がると、城の敷地内に身を躍おどらせる。

その動きは、とても常人では真似が出来ないだろう。獣人特有のしなやかさだ。

二人は、見張りの動きを警戒しながら、さらに中庭から城の中へと進んでいく。

鮮やかに城内に入り込むと、物陰に隠れて暫く息を潜める。

巡回をしている兵士が遠ざかっていく足音を聞いて、少女はふうと息を吐いた。

「上手くいったわね、サラ」

「はい、リーシャ様。それにしてもついてましたね。ヴァルフエントがあればどの軍勢を連れて城を出るなんて」

「ええ、これ以上の機会はないわ」

リーシャはそう言うと、床の上に右の手のひらをそっと当てる。

その腕には変わった防具、ガントレットがつけられている。

見事な彫刻ちゆうこくが施された金色のガントレットの甲こうの部分には、真紅しんくの宝玉ほうぎよくが嵌め込まれていた。

「サラ、これから捕らえられている仲間たちの匂いを探るわ」

「はい、リーシャ様」

リーシャは静かに意識を集中していく。

それと同時に、右手の甲にある赤い宝玉が淡く輝いていく。

彼女はそれを見つめながら、自分に言い聞かせるように言った。

「お父様の形見かたみのこの獣玉石じゆういしせきが、私に力をくれる」

まるで赤い石が少女の力を増幅するように、リーシャの聖印が開き、五感ごかんは鋭く研ぎ澄とまされていく。

元々、感覚が鋭い白狼族の嗅覚が極限まで高まっていく。

その時、何かを感じ取ったらしく、リーシャの小さな鼻がヒクンと動いた。

そして目を見開いた。

「そんな……」